

『浄土真宗聖典全書』 完結

—「宗祖篇上・下」について—

第2回

浄土真宗本願寺派総合研究所
教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉

はじめに

この度、浄土真宗本願寺派総合研究所において編纂を進めてきました、『浄土真宗聖典全書』全六巻がついに完結いたしました。『浄土真宗聖典全書』（以下、『聖典全書』）とは、親鸞聖人の開かれた浄土真宗のみ教えに関する聖教や史料をすべて収録したもので、高い史料性を保持しつつ、領解・伝道に活用できる聖典を基本理念として編纂されていま

す。

『聖典全書』の完結を記念して、今回は第二巻の「宗祖篇上」（平成二十三年三月刊行）と、その続篇となる第三巻の「宗祖篇下」（平成二十九年三月刊行）について、その魅力や活用法についてご紹介したいと思います。

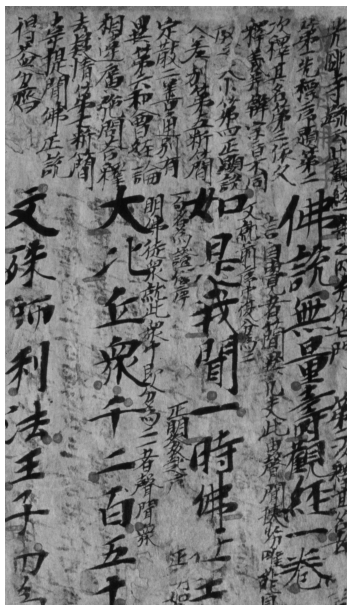
I 親鸞聖人の真筆をすべて翻刻

「宗祖篇上」と「宗祖篇下」の最大の特徴は、現在学界で知られている親鸞聖

人の真筆をすべて底本（文字に起こす元になる本）として翻刻し収録していることです。まず「宗祖篇上」からその主なものをあげますと、親鸞聖人畢生の大著である『顕浄土真実教行証文類』

（以下『教行信証』）は、底本に親鸞聖人の真筆本（いわゆる坂東本）を用いています。また『浄土三経往生文類』と『尊号真像銘文』は、上下二段組で翻刻した上で、ともに親鸞聖人の真筆本を底本としています。『一念多念文意』や

『唯信鈔文意』（上段）のほか、親鸞聖人がたびたび書写して門弟に与えられたといわれる、聖覚法印の『唯信鈔』も、底本だけでなく対校本（系統の異なる本）にも親鸞聖人の真筆本を用いており、本文や左訓（漢字や熟語の左側に小さく片仮名で書かれた註記）などを比較することができます。さらに真筆の御消息や本尊としての名号、親鸞聖人の御影像（安城御影）の上下段に書かれている真筆の讃銘も収録しています。また親鸞聖人ご自身が手控えとして書写された経



本派本願寺蔵『観無量寿経註』(部分)

文の抜粋や釈文、あるいは門弟へ書き与えられたと考えられる断簡類などの真筆もすべて収録しています。

次に「宗祖篇下」には、『観無量寿経註』と『阿弥陀経註』といわれるものを収録しています。これは、壮年期の親鸞聖人が自身の研鑽のため、『観無量寿経』と『阿弥陀経』の経文を書写し、さらにその行間や上下欄、裏面などに、ところせましと経文に係る善導大師の『観経疏』・『法事讚』等の註釈文を細小な字で丁寧書き込まれたものです。

原本では、経文の行間に複雑に配置されている註釈文を、本聖典では読解の便

を考えて、経文の該当部分に対応するよう適宜並べかえて翻刻しています。また

「宗祖篇下」には親鸞聖人の筆で源空(法然)聖人の法語・伝記・消息・行状などを書写された『西方指南抄』を収録しています。これは、源空聖人に関

する現存最古の言行録で、親鸞聖人の真筆を底本としています。また親鸞聖人が加点(白文の漢文に返点や読み仮名など

を書き入れること)された曇鸞大師の『往生論註』をはじめ、「善導大師五部九卷」(『観経疏』四卷・『法事讚』二卷・

『観念法門』一卷・『往生礼讚』一卷・『般舟讚』一卷)も収録しています。これによつて曇鸞大師や善導大師の聖教に対す

る親鸞聖人の読み方を知ることがができます。また親鸞聖人ご自身が書写された「法然聖人御消息」も収録していま

す。このように親鸞聖人の真筆を網羅して文字に起こした

聖教は、この『聖典全書』(宗祖篇上・宗祖篇下)がはじ

めてとなります。

Ⅱ 親鸞聖人の言行録などを収録

次にあげるべき特徴として、「宗祖篇上」には、親鸞聖人の著作や書写されたものだけではなく、親鸞聖人の言行を伝えた『恵信尼消息』や『歎異抄』なども収録しています。たとえば『恵信尼消息』には、親鸞聖人と共に暮らされた恵信尼公ならではの貴重な思い出ばなしが多く含まれており、親鸞聖人の、比叡山時代や源空聖人との出遇いにいたる経緯など、他の資料では知ることのできなかつた事柄を伝えていきます。また『歎異抄』も、親鸞聖人の法語を伝えるものとして、今日ではきわめて広く知られており、やはり他では知ることのできない親鸞聖人のすがたを多く伝えていきます。他にも親鸞聖人が門弟へ宛てた書簡(消息)の中で、何度も熟読するように勧められている『自力他力事』・『一念多念分別事』・『後世物語聞書』も収録し

ています。

また「宗祖篇下」には、親鸞聖人の加点を元にした延書（漢文体の原本を書き下しにすること）と伝えられる『仏説無量寿経延書』・『仏説観無量寿経延書』および『選択集延書』もおさめられています。さらに、親鸞聖人の直弟および源空聖人の門弟の書写による、源空聖人の『三部経大意』も収録しています。

Ⅲ 付録の活用

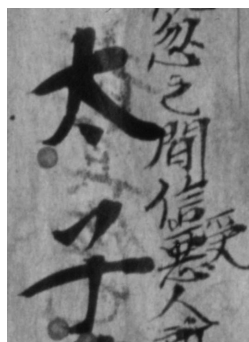
ところで『聖典全書』は学習の便を考えて、巻末にさまざまな付録を設けています。その例を紹介させていただきますと、「宗祖篇上」では「顕浄土真実教行証文類」返点校異」です。これは「教行信証」の底本と対校本との間で返点が相異し、文意が異なるものを一括して掲載したもので、たとえば、底本の「信卷」に「撰多少之言」（多少の言を撰する）とあるご文は、対校本の「真仏上人書写本（高田派専修寺蔵）」では「撰多少之

言」（多少を撰することば）とあり、読み方に違いがあることがわかります。『教行信証』では該当する本文に※印が付してありますので、ぜひ注目してください。

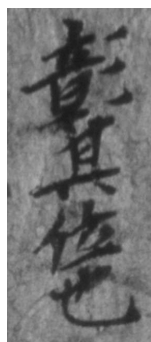
次に「宗祖篇下」では、「観無量寿経註」・「阿弥陀経註」対応表（付漢字对照）です。『観無量寿経註』と『阿弥陀経註』は、卷子本といわれる巻物の体裁であり、表側だけでなく裏側にも文字がびっしりと書かれています。しかも、驚くことに表裏が対応するように文字が記されています。

たとえば、右下の二つの画像のように、表書の経文「太子」のま裏にあたる位置に「彰其位也」（その位を彰わすなり）と書かれています。

この対応表では、その表書と裏書が対応するものを抽出して、わかりやすく経文順に並べています。併せて、『観無量寿経註』と『阿弥陀経註』と本聖典の第一巻「三経七祖篇」におさまる各聖教を対照して、漢字の相異を示した一覧表



（表書）



（裏書）

も載せています。これによって、親鸞聖人が書写するために見られた聖教の特徴がわかるように配慮しています。

このように、お聖教を拝読するにあたって、補助となるような付録がそろっています。ぜひ活用していただければと思います。

Ⅳ 連絡ページの活用

「連絡ページ」とは、『聖典全書』における聖教のご文が、他の聖典ではどこにあるのかを知らせる「ページ情報」のこ

とですが、今回の『聖典全書』の上欄には、『註釈版』（第二版）と『真宗聖教全書』（大八木興文堂）の連絡ページを付しています。また『教行信証』にはこれらに加えて、本文ははじめの下欄に「真蹟集」と略示し、『増補 親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）との連絡ページを付しています。これにより、他の聖典での確認がスムーズに行え、また『教行信証』の場合は、原本写真の確認までできるようなっています。また「宗祖篇上」は、

第一巻「三経七祖篇」と非常に連動性が高いのが特徴です。親鸞聖人は『教行信証』に『無量寿経』を多く引用されていますが、その引用箇所をしらべる方法があります。たとえば『教行信証』の

【例】（三経七祖篇「無量寿経」）

03 我至正
覺行卷5

03 我至成佛道

（図1）

【例】（宗祖篇下「阿弥陀経註」）

01 如来...
徳也化卷
10

01 如来欲明持名

（図2）

「行卷」に引用された「重誓偈」（『無量寿経』上巻）のご文なら、引用元の「三経七祖篇」の該当箇所の上欄に、「宗祖篇上」の該当巻数と頁数を示して、連絡ができるように工夫しています（図1）。つまり、『無量寿経』を拝読しながら、親鸞聖人がどこに引用されているかがわかるのです。

次に「宗祖篇下」の、親鸞聖人加点の『往生論註』、「善導大師五部九卷」についても同様に、第一巻「三経七祖篇」におさまるそれぞれの聖教と連絡の便をはかるために、本文ははじめの下欄に「聖典全」と略示し、巻数と該当頁を示しています。また『観無量寿経註』と『阿弥陀経註』については、「三経七祖篇」におさまる経文、または註釈文と連絡の便をはかるために、本文の上欄に経文、本文の下欄に註釈文との連絡頁をそれぞれ示しています。また『観無量寿経註』と『阿弥陀経註』と『西方指南抄』については、本文ははじめの下欄に「真蹟集」と略示し、『増補 親鸞聖人真蹟集成』の巻

数と該当頁を示しています。

また、『観無量寿経註』と『阿弥陀経註』、および親鸞聖人加点の『往生論註』と『善導大師五部九卷』については、「宗祖篇上」における宗祖関連の「引用文」との連絡をはかるため、聖教の引用頁を示しました（図2）。たとえば、『阿弥陀経註』の裏書に引用されたご文が、「宗祖篇上」の『教行信証』のどこに引用されているかがわかるのです。

V 次回の紹介

今回、紹介しました「宗祖篇上」「宗祖篇下」は、『聖典全書』全体では第二巻・第三巻にあたります。詳細につきましては直接ご覧いただいで、「連絡ページ」など、他にはない特徴を、是非活用していただければと思います。次回は第一巻の「三経七祖篇」（二〇一三年三月刊行）を紹介させていただきます。

問い合わせは総合研究所（075-371-9244）まで。